

全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第一章「3・11」

11

刻々と悪化する事態

首相官邸の迷走



2011年3月12日、東日本大震災による福島第一原発の事故を受け、記者会見する菅直人首相（首相官邸）

「どういう状況なんだ」「原発はもうなんだ」。官邸5階の執務室、首相の菅直人(64)はいらついてい。「君は原子力の専門家なのか」。を荒らげる音に原子力安全・保安院長の寺坂信昭(57)は「私は東大経済学部出身です。専門家ではありません」と返すのがやっとだった。官邸では東日本大震災の被災者救済に向け、緊急災害対策本部が史上初めて設置された。そこに東京電力福島第一原発で原子炉が冷却不能と報告が飛び込んできた。

と思ったわけ。だけど事故の時に原子炉のことが分かってない人が説明に来たって、聞いている方は分かるわけがない」

菅は東工大理学部で応用物理学を学んだ。冷却機能を失えば、炉心溶融に至ると容易に想像できたという。「原発は俺が見なきゃいかん」。他の閣僚任せにはできないと気を高ぶらせていた。

同じころ、原子力安全委員会委員長の班目春樹(62)は、官邸4階の大会議室前の広い廊下で延々と待ち続けた。原発で重大事故があれば、自治体や住民に異常を知らせる原子

力緊急事態宣言を首相が即座に発令する。専門家として政府に助言する役割を担う班目は宣言を出す会合に立ち会う決まりだが、それが一向に始まらない。

「待たされた私は、官邸にはしかるべき情報が入っていて対処できているだろうと勝手に思い込んでいたんです」

だが班目は楽観的すぎた。時間を追うごとに事態は悪化していく。東電から派遣された原子力部門の元最高責任者武黒一郎(64)とともに首相執務室に呼び出された。

「どうなのか予測を出せ」と迫る菅に、2人は返答に窮した。東電本店からの情報は断片的で、保安院からは原発の凶面すら届かない。

班目らはこの夜、閣僚らが集まった官邸地下中2階の小部屋と5階の

首相執務室を歩き来しながら、記憶を頼りに菅に助言を続けたが、対応は終始後手に回る。

「東電が送れって言うから、一生懸命電源車を送ったわけ。着いてああ良かった」と思ったらプラグが合わない、配電盤もやられているという。何をやっているのかねと思ったよ。

菅は当時のいら立ちを振り返る。

菅はこうして専門家と呼ばれる人々へ不信感を募らせていった。これが後に「官邸の過剰介入」と批判される行動に彼を走らせることになる。

情報もないまま、手探りで事故対応や住民避難の指揮を執る。闇をさまよつ、計器の見えない飛行機。全電源を喪失した第一原発だけでなく、官邸もまた別の暗闇を飛んでいく。(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 太田久史)